

てっぽう ひやくにんぐみ

鉄砲百人組のくらし

大久保の鉄砲百人組のくらしはどのようなものだったのでしょうか。

彼らには次のような屋敷地を与えられていました。同心100人の屋敷15万2千574坪（約50万㎡）、支配与力4人の屋敷7千492坪（約2万5千㎡）、支配与力4人の秣場（まぐさば・馬の飼料となる草を採る場所）4千270坪（約1万4千㎡）、その当時百人組の組頭（くみがしら）だった久世三四郎の抱屋敷（かかえやしき・自分で所有する屋敷地）1万3千坪（約4万3千㎡）、大砲の射撃訓練場所である大筒角場（おおづつかくば）8千164坪（約2万7千㎡）、長光寺1千500坪（約5千㎡）、百人組の鉄砲練習場である組鉄砲角場（くみてっぽうかくば）6千560坪（約2万2千㎡）、以上です。

屋敷地には三本の道が造られ、南町、仲町、北町に分けられ、町の入口には木戸が設けられました。ひとり分の屋敷は間口（まぐち）が狭く、奥行きが広いものでした。住居の裏は自分たちで農作業ができるような土地になっていました。

さて、鉄砲百人組の通常の仕事は、江戸城大手三ノ門を守ることでした。また、将軍が上野の寛永寺に参詣するときには、寛永寺の文珠楼（もんじゅろう）で、芝の増上寺に参詣するときには、増上寺の山門前で警備をしました。

しかし、この勤務も毎日ではなく、多くは屋敷内でくらすことになりました。彼らの給料は30俵2人扶持（ふち）という、たいへん少ないものだったので、自分たちの屋敷地をみずから耕していました。しかし、江戸時代も中頃になると、しだいに経済的に困るようになり、多くの者は内職をするようになりしました。当時、多くの下級武士たちは草花の栽培や、鈴虫・こうろぎの飼育もしていました。大久保の鉄砲百人組の場合、つつじの栽培でたいへん有名になり、つつじを目当てに多くの人々が屋敷を訪れるようになりしました。



江戸時代の百人町周辺

現在の百人町周辺

注：てっぽうは鉄砲とも書きますがパンフレットでは常用漢字表記の鉄砲で統一しました。

発行：新宿区大久保特別出張所

協力：新宿歴史博物館